

森鷗外作「雁(がん)」岩波文庫 岩波書店 1936年2月29日刊を読む

雁(がん)

1. 「さあ、こういう風にして歩くのだ」といって、石原と僕と二人で、岡田を中に挟んで歩き出した。三人で初から気に掛けているのは、無縁坂下の四辻にある交番である。そこを通り抜ける時の心得だといって、石原が盛んな講釈をし出した。なんでも、僕の聴き取った所では、心が動いてはならぬ、動けば隙を生ずる、隙を生ずれば乗せられるというような事であった。石原は虎が酔人を嘔わぬという譬を引いた。多分この講釈は柔術の先生に聞いた事をそのまま繰り返したものかと思われた。

「して見ると、巡査が虎で、我々三人が酔人だね」と、岡田が冷かした。

「Silentium!」(静かに)と石原が叫んだ。もう無縁坂の方角へ曲る角に近くなったからである。

角を曲れば、茅町の町家と池に沿うた屋敷とが背中合せになった横町で、その頃は両側に荷車や何かが置いてあった。四辻に立っている巡査の姿は、もう角から見えていた。

2. 突然岡田の左に引き添って歩いていた石原が、岡田に言った。「君円錐の立方積を出す公式を知っているか。なに。知らない。あれは造倣はないさ。基底面に高さを乗じたものの三分の一だから、もし基底面が圏になっていれば、 $\frac{1}{3}r^2 h$ が立方積だ。 = 3.1416 だということを記憶していれば、わけなく出来るのだ。僕は を小数点下八位まで記憶している。 = 3.14159265 になるのだ。実際それ以上の数は不必要だよ。」

こういつているうちに、三人は四辻を通り過ぎた。巡査は我々の通る横町の左側、交番の前に立って、茅町を根津の方へ走る人力車を見ていたが、我々にはただ無意味な一瞥を投じたに過ぎなかった。

3. 「なんだって円錐の立方積なんぞを計算し出したのだ」と、僕は石原に言ったが、それと同時に僕の目は坂の中ほどに立って、こっちを見ている女の姿を認めて、僕の心は一種異様な激動を感じた。僕は池の北の端から引き返す途すがら、交番の巡査の事を思うよりは、この女の事を思っていた。なぜだか知らぬが、僕にはこの女が岡田を待ち受けていそうに思われたのである。果して僕の想像は僕を欺かなかった。女は自分の家よりは二、三軒先へ出迎えていた。

僕は石原の目を掠めるように、女の顔を岡田の顔とを見較べた。いつも薄^{うすくない}紅^{にお}に勻っている岡田の顔は、確^{たしか}に一入赤^{ひとしお}く染まった。そして彼は偶然帽を動かすらしく粧^{よそお}って、帽の庇^{ひさし}に手を掛けた。女の顔は石のように凝^こっていた。そして美しく睜^{みは}った目の底には、無限の残^{のこり}惜^おしさが含まれているようであった。

この時石原の僕に答えた詞^{ことば}は、その響が耳に入っただけで、その意は心に通ぜなかった。多分岡田の外套^{がいとう}が下ぶくれになっていて、円錐形に見える処^{ところ}から思い附いて、円錐の立方積ということを出したのだと、弁明したのである。

石原も女を見ることは見たが、ただ美しい女だと思っただけで意^{がい}に介せず^{かい}にしまつたらしかった。石原はまだ饒舌^{しやべ}り続けている。「僕は君たちに不動の秘訣^{ひけつ}を説いて聞かせたが、君たちは修養がないから、急場に臨んでそれを実行することが出来そうでなかった。そこで僕は君たちの心を外へ転ぜさせる工夫をしたのだ。問題は何を出しても好かったのだが、今いったようなわけで円錐の公式が出たのだ。とにかく僕の工夫は好かったね。君たちは円錐の公式のお蔭で、unbefangen(自然な)態度を保って巡査の前を通過することが出来たのだ。」

三人は岩崎邸に附いて東へ曲^{ところ}る処^いに来た。一人乗の人力車^{いちにんのり}が行き違^{ちが}うことの出来ぬ横町^はに這入るのだから、危険はもう全くないといっても好い。石原は岡田の側を離れて、案内者のように前に立った。僕は今一度振り返って見たが、もう女の姿は見えなかった。

4 . 僕と岡田とは、その晩石原の所に夜の更けるまでいた。雁^{さかな}を肴^{さかな}に酒を飲む石原の相^{しょうばん}伴をしたといっても好い。岡田が洋行の事を噫氣^{あくび}にも出さぬので、僕は色々話したい事のあるのをこらえて、石原と岡田との間に交換せられる競漕の経歴談などに耳を傾けていた。

上条へ帰った時は、僕は草臥^{くたびれ}と酒の酔とのために、岡田と話すことも出来ずに、別れて寝た。翌日大学から帰って見ればもう岡田はいなかった。

一本の釘から大事件が生ずるように、青魚^{さば}の煮肴^{にざかな}が上条の夕飯^{せん}の饌^{せん}に上ったために、岡田とお玉とは永遠に相見^{あひま}ることを得ずにしまった。そればかりではない。しかしそれより以上の事は雁という物語の範囲外にある。

P148 ~ 152

[コメント]

森鷗外の著した小説「雁(がん)」の最終章。明日、欧州に向けて旅立つ主人公の友人岡田と岡田を親う玉のほろ苦い恋物語。

明治時代への知識人の卵である東京大学医学生の日常生活の一端を知ることができる。

読書の秋の本格的な読書のスタートには森鷗外はもってこいの作家だ。

- 2009年9月21日 林明夫記 -